

未婚化のなかの夫婦分業の解消と“新規”分業の進行

神山 英紀

（帝京大学）

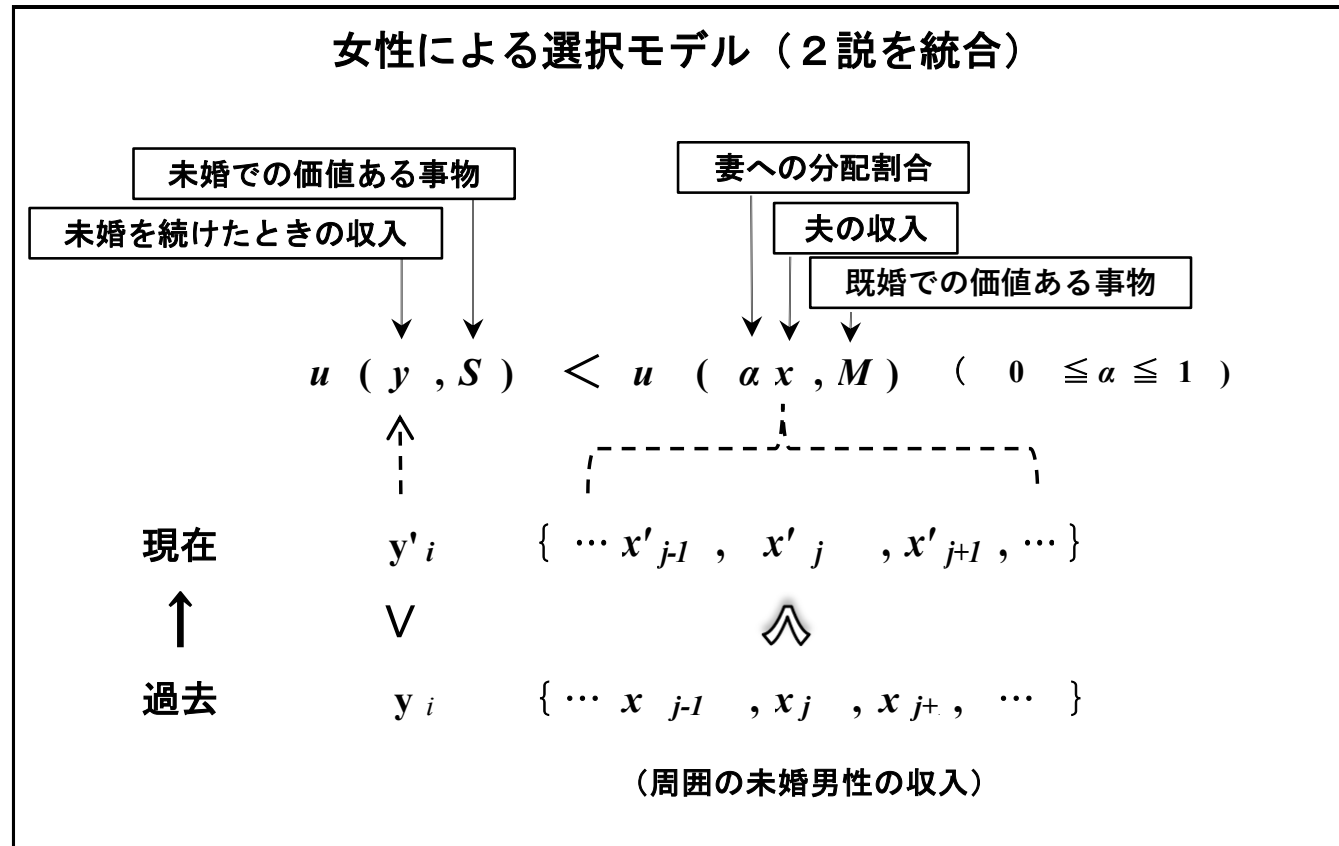
【要旨】結婚とは無期限で男女が協力する約束であり、分業・互酬・保険等の働きで、個々で得る以上の「何か」がそれで得られる。未婚化は、その内、夫婦の分業の解消で、未婚生活（×2人）と比べての結婚生活のプラス分が減り生じた。「何か」は、仕事と家事（含育児）と自由時間で創る価値の和と概念化できる。さらに操作化し（夫婦－未婚男女）の差を長期で見ると、自由時間が失われてゆく一方で、30歳代の結婚世帯収入は未婚男女世帯のそれを下回り続けたことが分かる。

□なぜ未婚化が進んだのか？ 「なぜ」の説明には「理論」が要る。

例)「なぜ夕日は赤いのか？」→「色とは光の波長の違いで白色光はそれらの合成で…」(一般理論)。「地平付近の厚い大気層を通るさい短波の赤以外は届かず…」(特殊モデル)で説明。だから、まず、「結婚とは何か」・「なぜ人は結婚するのか」など理論が要る¹⁾。

□既存の仮説で理論が背景にあるといえるのは、「女性の機会費用上昇説」²⁾と「男性賃金低下説(日本経済停滞説)」³⁾。これらは共に、合理的選択理論を背景に「女性による選択モデル」を構築し説明を試みている。両説をまとめて簡略化した、次のモデルを提示する。

◇女性の将来の効用が「未婚<既婚」なら結婚。「収入」が効用の指標。それ以外の要素＝「価値ある事物」は不変を仮定。過去から現在にかけ、女性の収入 y が増大(女性の機会費用説)、あるいは周囲の男性の収入 x が減少(男性賃金説)したなら、不等式は成立しなくなる＝未婚化する。



□しかし、我われがいう「結婚」は、(1)2人が1組になる、(2)期限なしの持続的な相互行為、なのは明らか。上の「選択モデル」はそれとかけ離れている。代わりに、「協力ゲーム理論」に基づく「男女の約束モデル」を示す⁴⁾。

◇結婚とは？ 終わりの期限を決めずに男女が協力しあい、互酬・分業・保険等によるメリットを2人で得ようとする「約束」。

◇なぜ人は結婚するのか？ 任意の未婚男女 i と j は、各々が未婚を続けて得られる“効用”より結婚後の2人の“効用”全体を再配分して得られるもののほうが大きそうなら結婚する。以下は数値例。 未婚の2人の和=3 < 5=結婚の効用 の条件で結婚が成立することに注意。

◇すると社会全体で生じる結婚数は両者の差(5-3)に依ると推論できる⁵⁾。

男女の約束モデル（数値例）



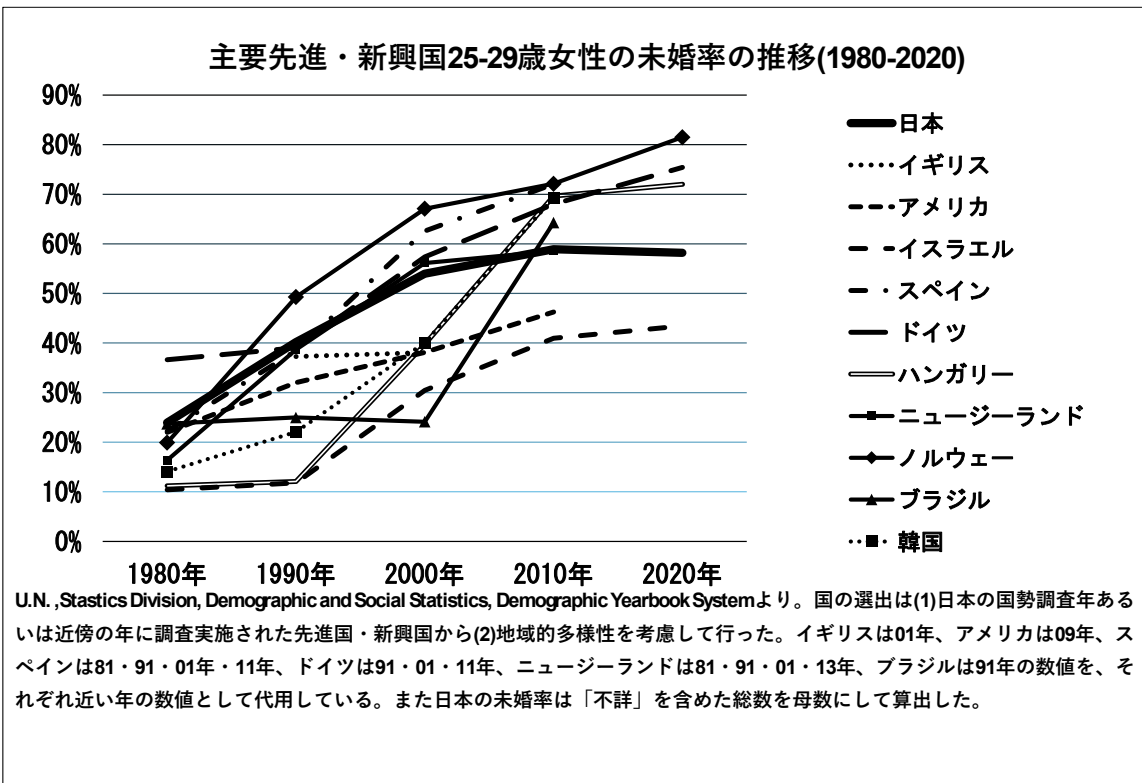
(^^) _U~~ 《しかし、ここで疑問が…》

□上の数字（効用）は協力ゲーム論でいう「譲渡可能効用」、一般理論なら無内容でいいが、結婚に適用したモデルにおいて具体的には何？

□G. Becker の「結婚の理論」での結婚の定義は上に類似⁶⁾。そこでは、効用にあたるのは「産出（アウトプット）」＝世帯が産出する「家事生産物」。この「家事生産物」は、「市場での購入物」と「家族成員の時間」とから産出される。例）食材をスーパーで買い、調理し、食卓で歓談すれば、その世帯は、料理と歓談（財とサービス）を産出したとみなされる⁷⁾。

(^^) _U~~ 《ところで Becker といえば…未婚化の理由について、先の2つとは異なる仮説をつくることができる。》

(1) 過去 40 年、先進国・新興国の多くで未婚化は進んだ。(同棲や事実婚など多様性あるが傾向としては明確。) ゆえに、その理由はわが国の特殊事情でなく、多くの国に共通した歴史的経験に求められる。



(2) 未婚化の軌跡は劇的で単調で流麗⁸⁾。それは単一の直接要因が持続的かつ強力に作用し続けたことを示唆⁹⁾。

(3) G. Becker (70 年代米国) は、結婚する理由の1つとして夫婦で分業するメリット、すなわち相対的に賃金率が高い男が外部の労働を、それが低い女が家事を担う、を挙げたのは広く知られている。

(4) ところで、過去数十年、男女賃金率の差は一貫して縮小し、分業から共働きへの結婚形態の転換が一貫して進行したのは自明。

ゆえに、「男女賃金格差の縮小等で、夫婦で分業する意味が無くなり、未婚化が進行した」は極めてオーソドックスな仮説である。

□上の「男女の約束モデル」を参照すれば、分業婚から共働き婚への変換により、「結婚の効用（産出）」が減少し、「未婚男女の効用（産出）を併せたもの」との差が縮小し、未婚化が進んだ、といえる。

□なお、理論上の量的減少を、我われは、文化の質的変容として経験する。それは、「シアワセなケツコンへのアコガレ」が、数十年かけていつのまにか消えてゆく過程に対応している。

◇いうまでもなく、背景には、かつての労働市場での女性への全面的抑圧・差別がある（→参考資料1）。しかし、短期的に世の変化が期待できなければ、人々はそれを所与として実現可能な幸せを求める。

◇かつて、我われは、あの「国民的アニメ（2代続けて専業主婦）」に究極の家族の幸せを見出し、あの「浪花節」にさえ至高の夫婦愛を見た（→参考資料2）。女性は報われぬ労苦からの解放、男性は後顧の憂いなく仕事に打ち込めることを期待、そのため、結婚すること自体を喜び、尊び、結婚相手に感謝できた（…!?)

◇結婚と未婚（×2人）との差異が縮小すると、夫婦関係はゼロ=サム・ゲームに近づく。これを反映し、個々人の結婚する／しないの意思決定の焦点も、男女の一般的な社会的差異から、相手性の人々の属性の差異へと移る。（すると、結婚が「女性による選択」にさえ見えてくる。）

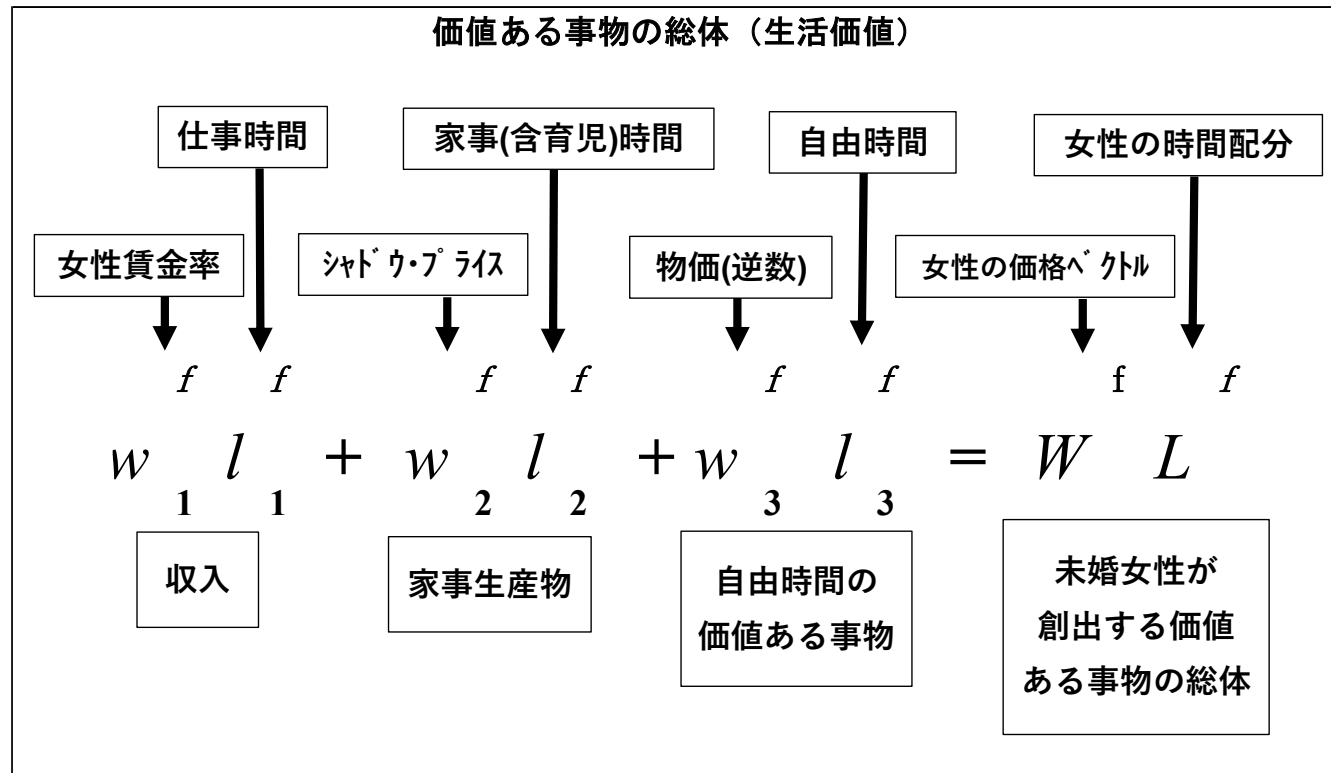
(^^) _U~~ 《話を戻すと…》

□譲渡可能効用は具体的には何か？

- (1) 足したり割ったりできるのだから “主観的” 効用ではない、
- (2) 仕事と家事の分業による効用を問題にしたいのだから、収入とイコールにはできない、
- (3) Becker 流に「家事生産物」とすると、先の例、調理も、食事も、睡眠も、散歩も、家事生産物の生産と消費となり、我われの 日常感覚と大きく乖離する。つまり、その経済学的枠組みの下では、国民的関心事としての未婚化の謎に答えることは難しい。

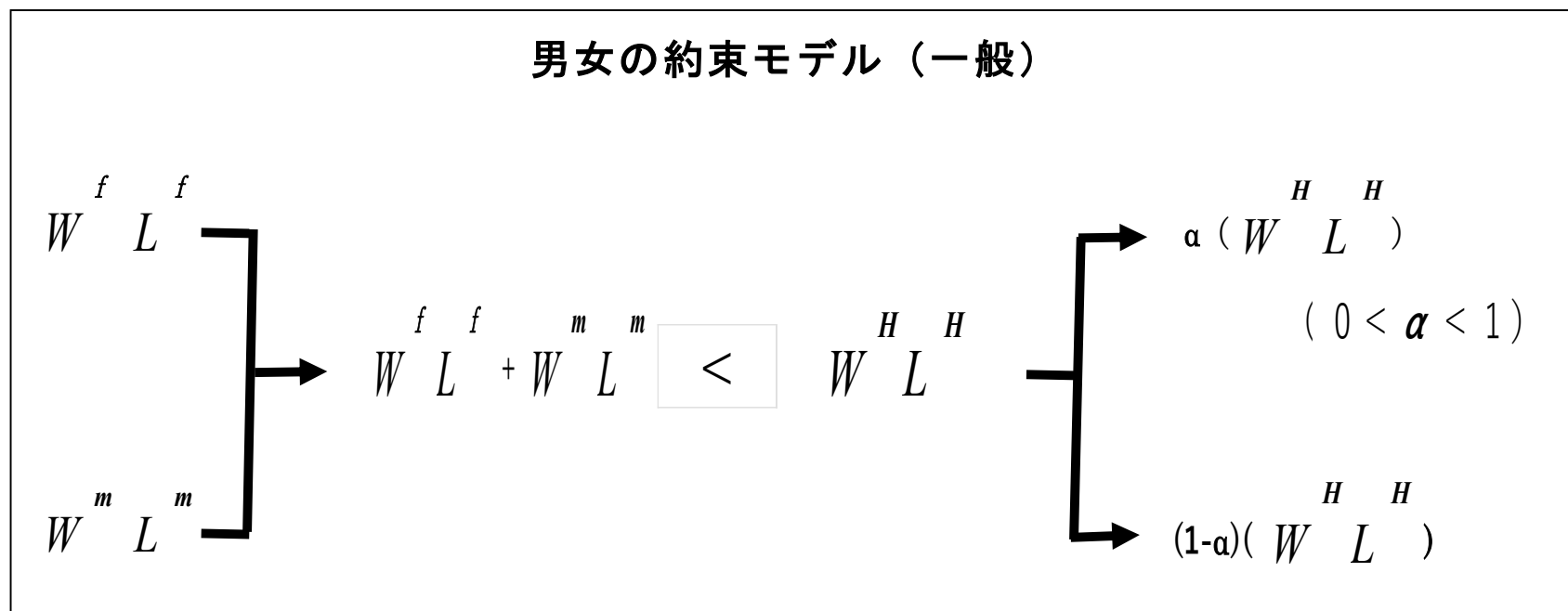
我われの問題意識に準じた「譲渡可能効用」の概念化が必要。

□Becker 以降の展開、未婚化のあるいは広く社会学の先行研究の視点をふまえ、次のように譲渡可能効用=「価値ある事物の総体(生活価値)」を定義する。



□上が先の図の数字（未婚女性の l ）で表現されていたもの。これに基づき、「男女の約束モデル」は次のように表現できる。

$W^{f+m} = (w_1^f, \dots, w_3^f, w_1^m, \dots, w_3^m)$, 夫婦の時間配分 L^H として,



□ある時代の代表的結婚について考える場合、男女賃金率・シャドウプライス・物価指数（逆数）等と各生活時間の平均値とから各数量が得られるだろう。

□個々人／個々の結婚について考える場合、各人／各夫婦は賃金率・シャドウプライス・物価（逆数）等を所与に、主観的な期待効用を最大化する時間配分を求めると仮定できる¹⁰⁾。（規範・習慣・制度的制約が必要なこともあろう。）

□ただし問題意識によっては、必ずしも、1つ1つ、それぞれを数量として算出してから大小を比較しなくてもよいと考える¹¹⁾。

□というのは、一般的に、「もし収入と家事生産物が同じなら、自由時間が短いより長いほうを好む」し、「少ない収入で自由時間が短いよりも、多くの収入があって自由時間が長いほうを望む」など、仮定できるからである。

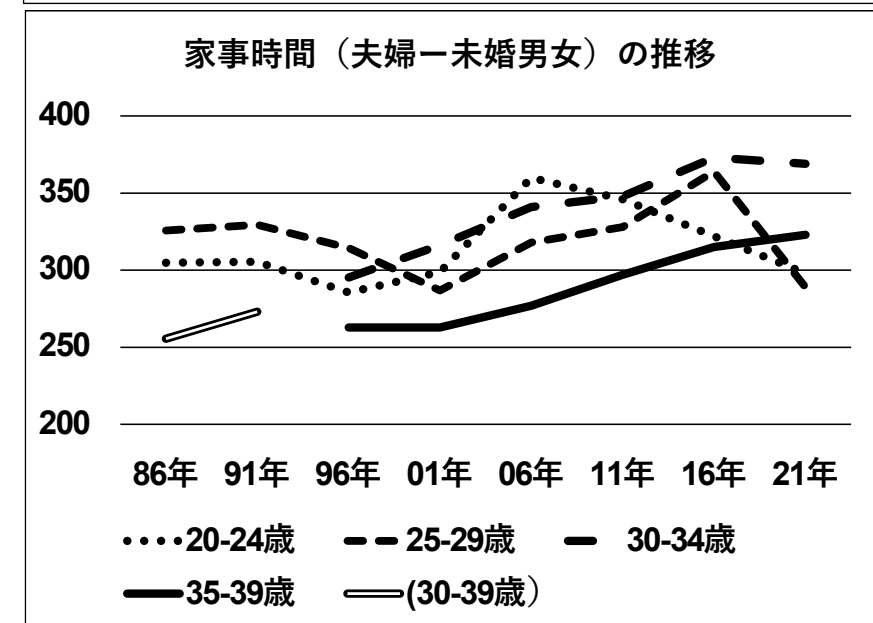
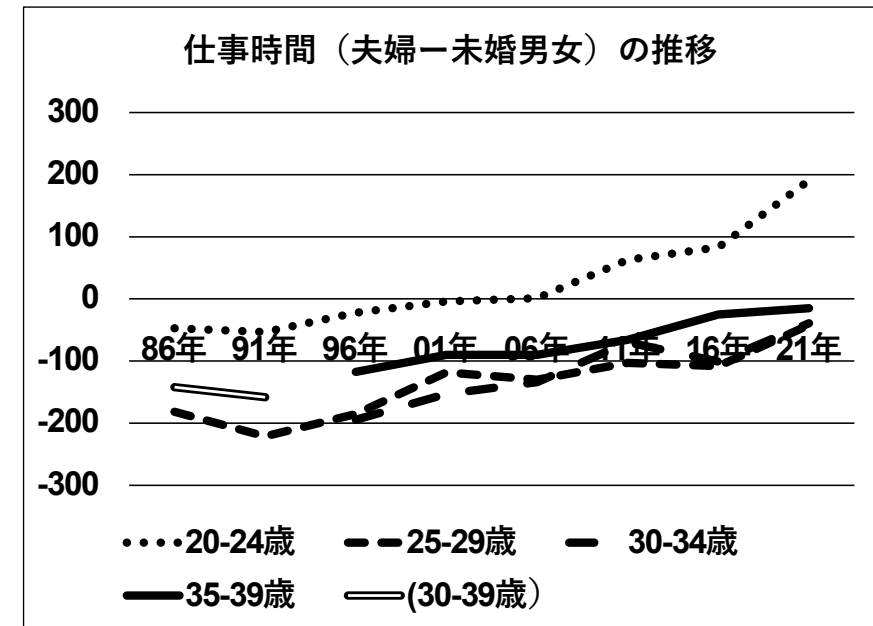
□以下では『社会生活基本調査』（1986-2021 年）、および『国民生活基礎調査』（1986-2008 年）のデータを用いる^{12) 13)}。おもに3種類の生活時間の推移をみて分業の解消、結婚-未婚の和の差の縮小、未婚化の進行について考察する。

■予測と検証■

予測 I 夫婦分業の解消が進む中で未婚化が進行し、結婚した夫婦の自由時間は、未婚の男女のそれに比べ減少したはず。

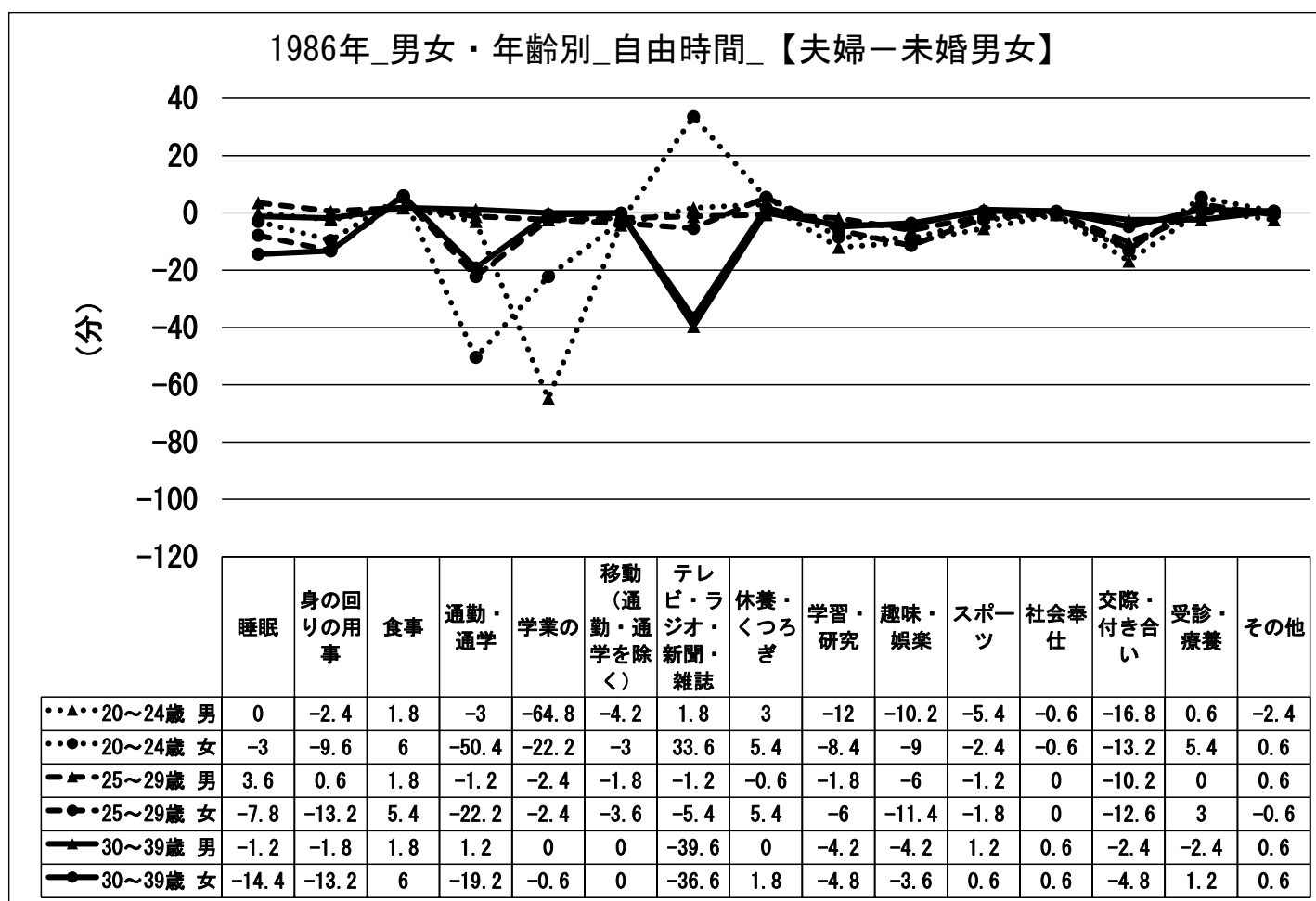
検証 I - (1) まず、男女トータルでの仕事時間の差（夫婦－未婚男女）の推移。かつてのマイナスからほぼ一貫した増加によって2, 3 時間ほど増加。

検証 I - (2) 次に、男女トータルでの家事時間の差（夫婦－未婚男女）の推移¹⁴⁾。長期的には増加傾向があり、かつてより1 時間ほど増えた。



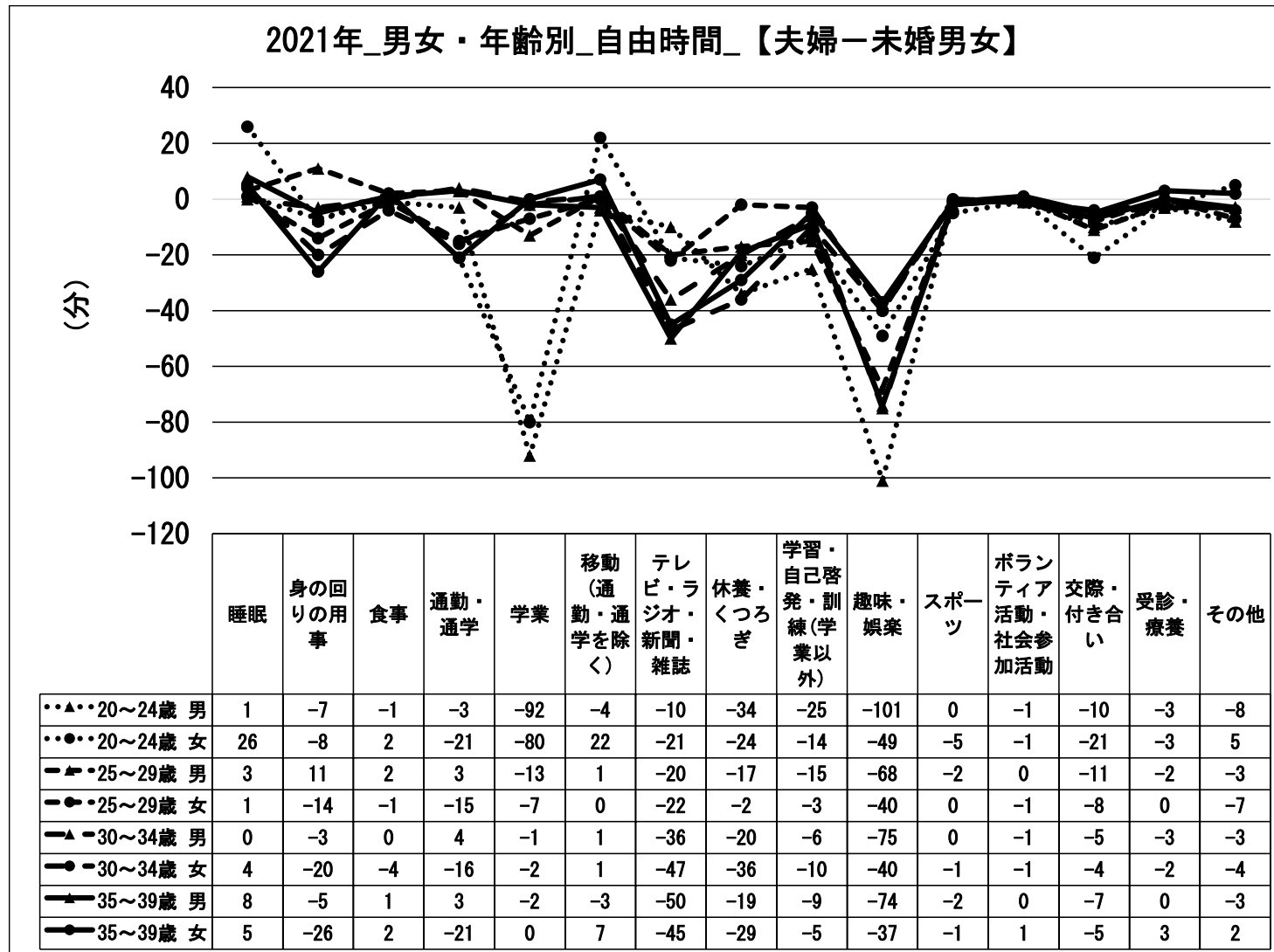
検証 I - (3) 「自由時間」の定義は「仕事時間」・「家事時間」以外なので、トータル自由時間の差（夫婦—未婚男女）の減少は明らか。両者の増加分は3～4時間＝自由時間は1人1日平均1時間半～2時間減少した。

◇では、自由時間の内の何が減少したのか？まず、1986年時点での差異が以下。

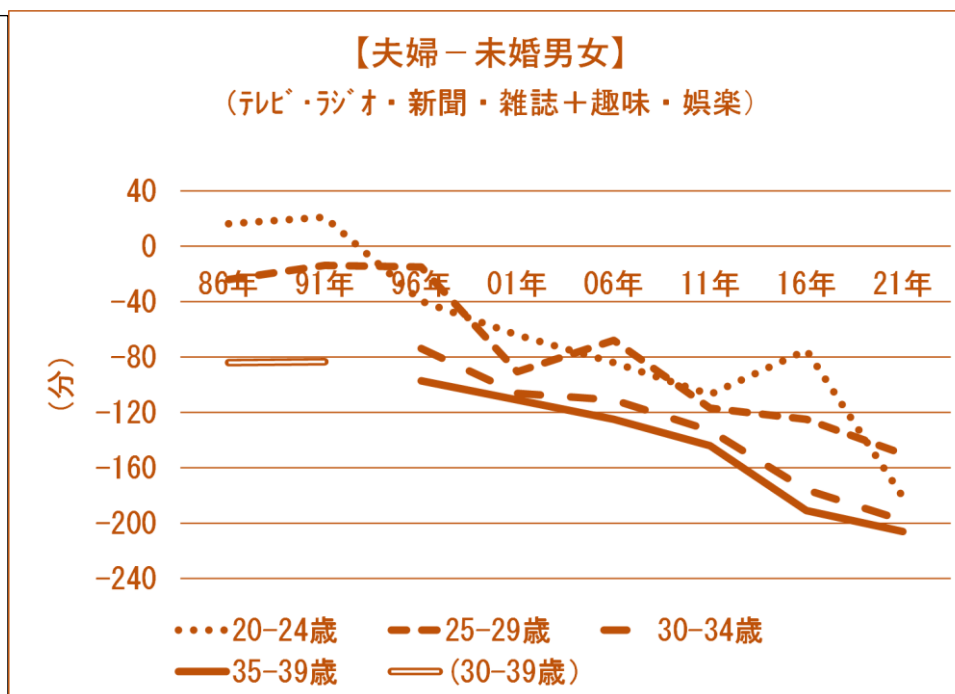
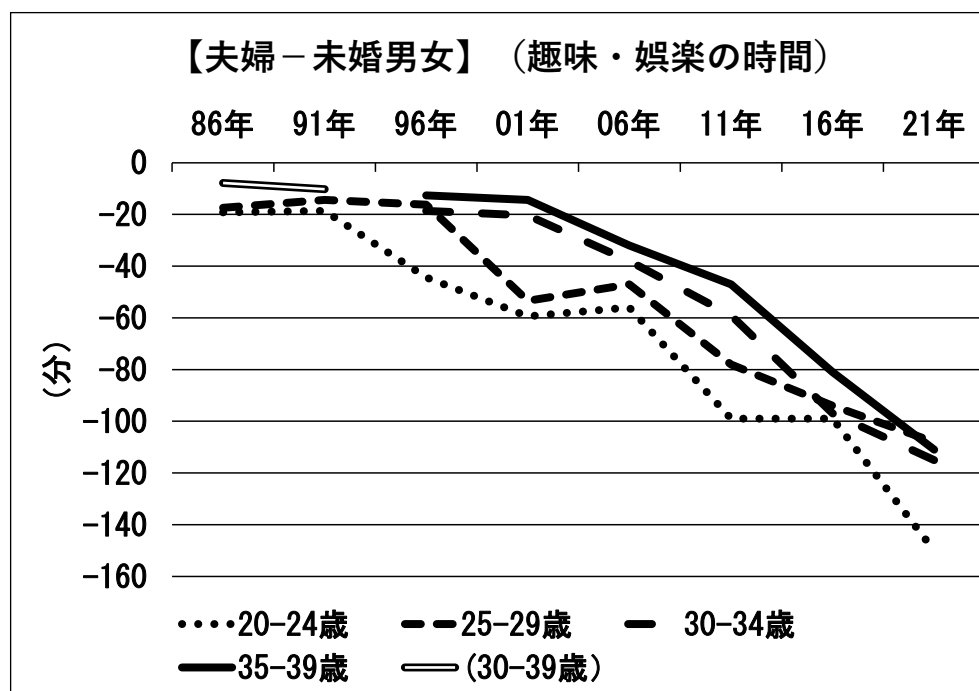


◇↑かつて結婚で自由時間が減ることはなかった！分業は女性の仕事時間減らし自由時間が急増、それを子育て等に充て差し引きゼロと解釈できる。

2021年では↓男女年齢問わず広範囲で、結婚すれば自由時間が減る。



◇時間を通じてみると、とくに趣味・娯楽の時間の一貫した減少が顕著。

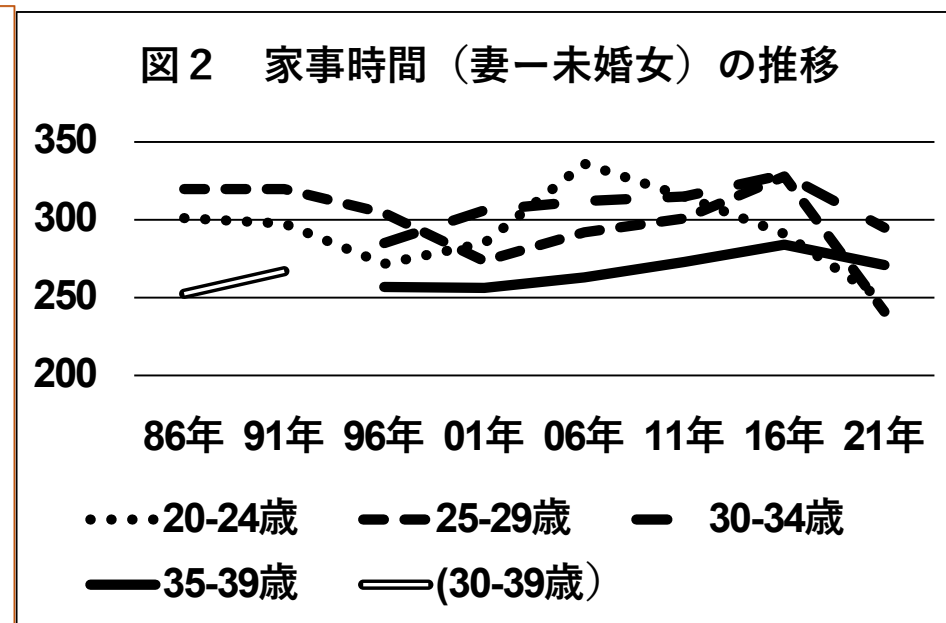
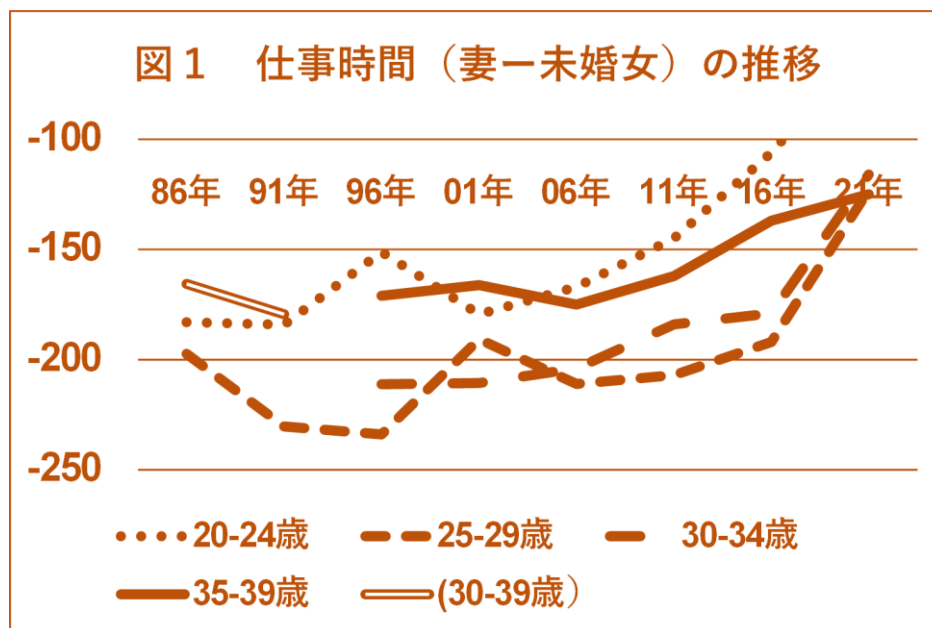


◇ただし未婚男女の「趣味…」時間の割合自体がこの間増しているのです、そのせいもある。そこで、「趣味…」と代替的に減った「テレビ…新聞…」の時間も加えて夫婦との差の変化をみたものが右。1人1日1時間も減少。

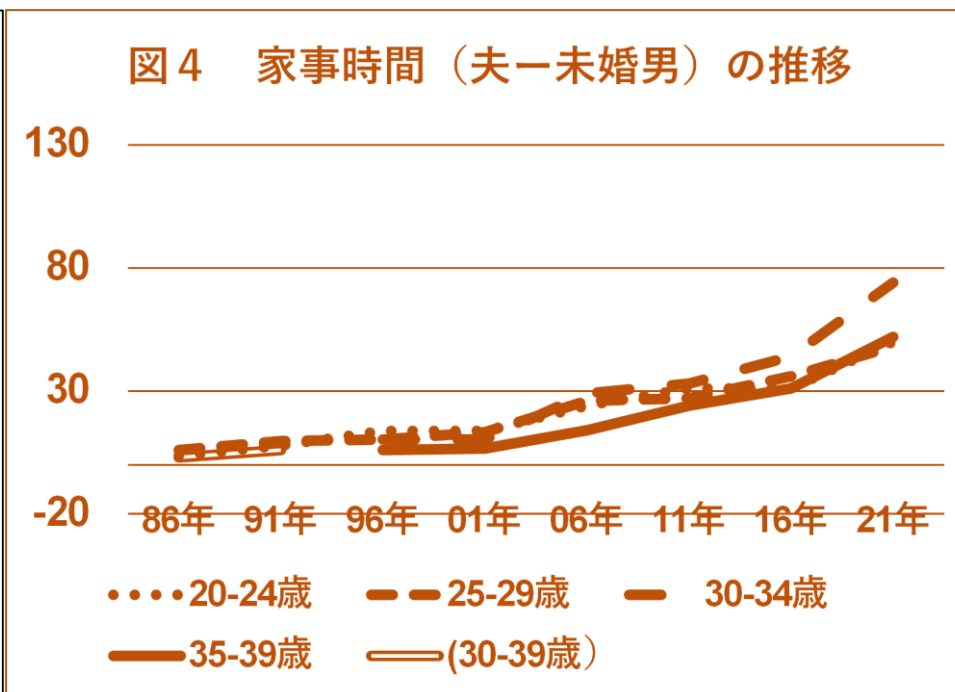
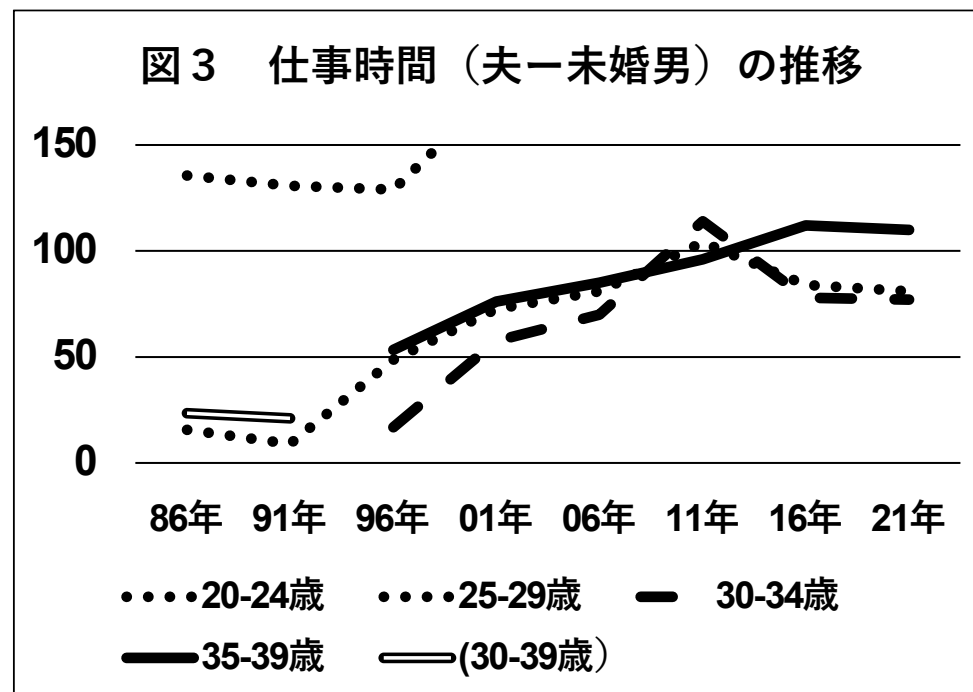
◇この「減少」は夫婦と未婚男女の差異の変化であることに注意。「結婚すると子育て等で忙しくなるから当たり前」という話ではない。(それでいうなら、かつては「忙しくならなかった」のである。)

検証 I - (4) 自由時間の減少に寄与したものは何か？

◇女性の仕事時間の差（妻－未婚女）の推移をみると、マイナス 3, 4 時間からマイナス 2 時間へほぼ一貫して増加している。一方で、家事時間の差は、5 時間付近を横ばいで、近年のみ低下がみられる。



◇男性の仕事時間の差（夫－未婚男）は、0から1時間へほぼ一貫して増加。
 一方、家事時間の差も0から1時間へ、ほぼ一貫して増加している。



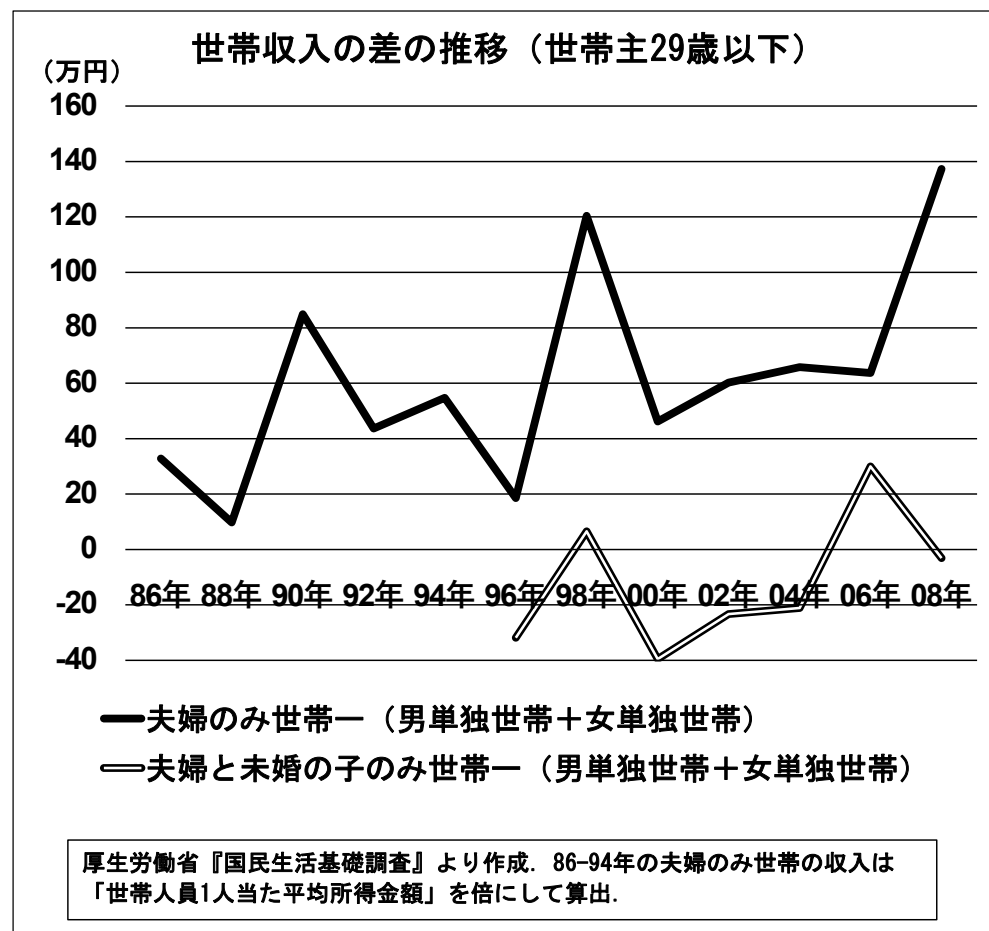
◇図1と図4は分業解消の傾向に合致するが、図2と図3は整合的ではない。
 （ただ、これは「解消が不十分」というより、分業を“止めた”夫婦が、それでも絶対的必要が生じる育児への対応として自由時間を削り、浮かせた分の3～4時間を新たに分業して使い始めたと報告者は解釈している¹⁵⁾。）

予測Ⅱ 夫婦分業の解消が進む中で未婚化が進行し、結婚した夫婦の世帯収入は未婚の男女単独2世帯の和に比べむしろ減少していったはず¹⁶⁾。

検証Ⅱ-(1)

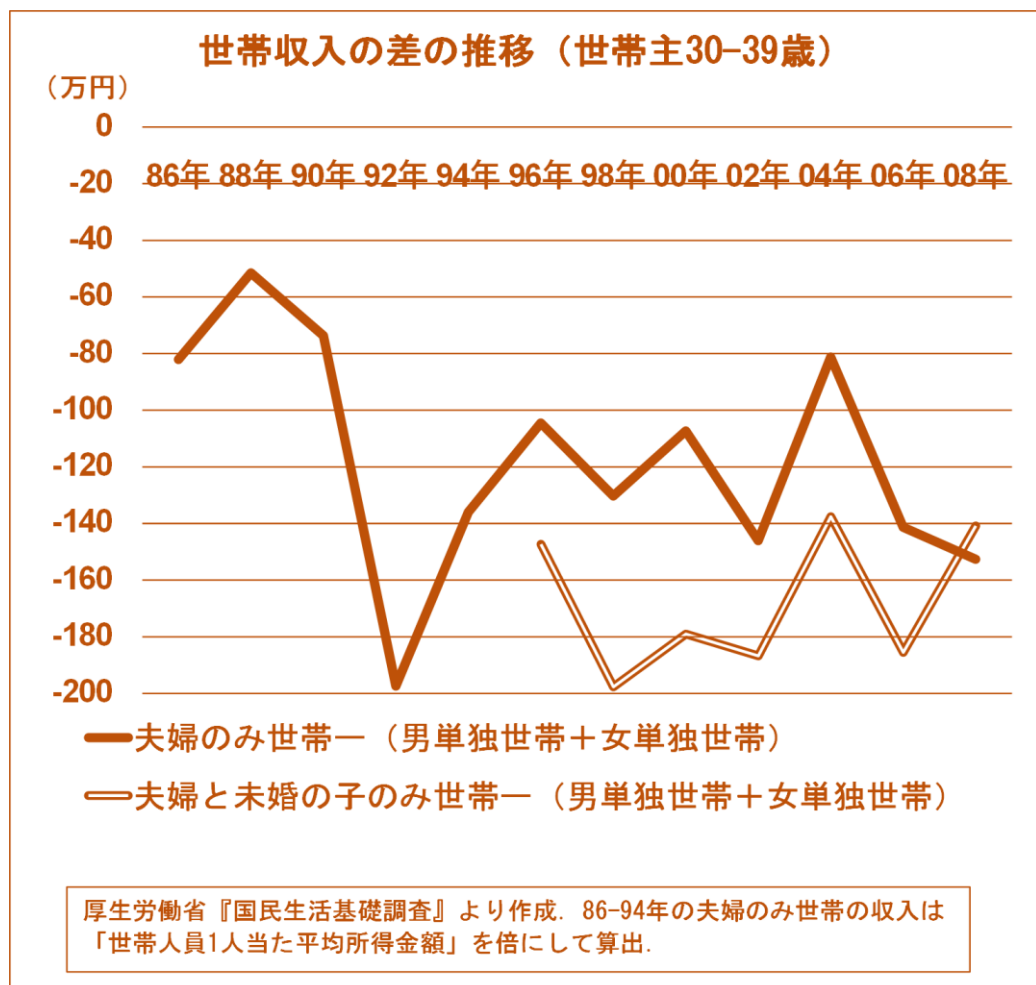
◇「昔の女性は結婚すると仕事を辞めたが今は働き続ける、だから自由時間は確かに減ったかもしれないが、しかし、世帯収入は増えただろう」…果たしてそうか？

◇世帯主29歳以下では、確かに増加傾向、約20年で100万あるいは30万円程度、差は増えた。



検証Ⅱ-(2)

◇一方、世帯主 30-39 歳の場合、夫婦のみ世帯との差では、少なくとも当該 22 年では**マイナス幅がむしろ拡大する傾向**がみられる。夫婦と未婚の子の世帯でも、マイナス 150 万～200 万円のまま横ばい。



◇この間も分業→共働きは進んだはずだが、なぜ？ 1つの推論。多くの“女単独”は、かつての“仕事人間の夫”に似る。最終到達点「家事や子育てを同等に担い働く夫婦の収入」と「“家庭を顧みず”働く男女の収入」の差に向かっている。前者が後者を下回っても不思議ではない。

□結論□

- (1) 理論上の結婚を「より多くの価値ある事物を男女が協力して創る約束」とみなせば、社会が生みだす結婚の数は、「夫婦がつくる価値」が「未婚男女が各々でつくる価値の和」をどれだけ上回るかで決まるといえる。すると、「未婚化は、男女賃金格差の縮小等による夫婦分業の解消で、両者の差が縮まって生じた」と推論できる。

ただ、その場合、そこで、足し引き、分割できるような「事物」の概念化・操作化が問題となる。生活時間の3分割に基づく「価値ある事物の総体（生活価値）」は単純で、先行研究を活かし、理論的矛盾なく、問題意識に応じた柔軟な操作化も可能にみえる。

- (2) 試行的な生活時間の分析では、夫婦分業の解消が自由時間の減少に大きく関わっていると分かる。一方、世帯収入では、男女単独世

帯のそれと比較すると、30 歳代ではマイナス幅が拡大する傾向さえみられた。

「約束モデル」に従えば、未婚者は、未婚を続けた場合と結婚した場合とで得られる「価値ある事物」の大小を、長期的将来を見据えて比較するが、近い将来のウェイトが高いのは当然。平均初婚年齢が 25～31 歳であるから、30 歳代の見通しは結婚の鍵といえる。

結婚すれば自由時間が減る一方、全体として収入は増えない¹⁷⁾。重要なのは、この“マイナス”幅が、何十年もの間、単調に拡大していった過程である。各時代を生きる未婚者たちは、むろん、このような時代を通じた漸次的変化は知る由もないが、その時々では、自分が結婚することの意味を十分感得し判断してきたに違いない。

※念のため付言すると、先走って政策的介入を構想するとき、未婚化＝悪として旧来の夫婦分業の復活を求めるのはもちろん短絡で、そもそも男女賃金差が小さいときに分業しても夫婦は得しない。

注

- 1) ここで使っている「理論」の意味は(Popper 1972=1972)の科学論に準拠したもので、自然科学・社会科学問わず広範な学問分野で實際上共有されている。ただ社会学においては、必ずしもこのような意味で「理論」が用いられていないことは明白である。社会学者 U. Beck は「社会学理論には、いくつもの顔がある。理論に分類される現代の著作を見渡すと、理論構成について大まかに二つの方向性を区別できることがわかる」とし、「…観察可能な事象や現象を説明し、それらは社会的行為および社会生活についての一般的・普遍的な『法則』に還元し得るという意味で、理論と捉えている」「説明的理論構成」と、それと対比され Beck 自身が意図する「時代診断的理論構成」とを、簡潔・適確に整理し区別している(ベック・鈴木・伊藤 2011:247)。この二分法を採用すれば、ここで「理論」と呼ぶものは前者となる。なお、社会学における上記「説明的理論構成」の必要を論じたマニフェスト的論文として(盛山 1986)を挙げることができる。また、社会学に不可欠なデータ収集・分析方法として社会調査があるが、そこでは、通常、理論とは、データ間でみられる相関関係に一般的な仮説を適用して因果関係として解釈するものとみなされており(原・海野 2004:17)、それはここでいう理論と基本的に同じ性格を持つものと考ええる。
- 2) ここに挙げた2つを含む未婚化をめぐる諸説は、少子化の背景である未婚化が国民的関心事となるのに伴い、アカデミックな領域をはるかに越えて提示され続けている。とくに前者については、経済学の基本概念を使った説明であり、最初に公的にこの説を唱えた人物・研究は明確でないが、(八代 1993)は比較的早い時点で一般に広くこの見解を知らせた著作と考えられる。「女性にとって、結婚することのコスト(機会費用)は、現在の仕事を行うことから得られる利益に等しい」(八代 1993:64)。
- 3) この説は、報告者の見聞の限り、社会学分野および世間一般に最も浸透している。源泉のすくなくとも1つは、社会学における未婚化研究の実際上のパイオニアである山田昌弘氏によるものである。山田の未婚化の理由についての見解は、時期により違いがあり、また複数の要因が挙げられている。「男女共同参画が進まない、子育て期の若者に対する経済的支援がない、そして、若者の収入の不安定化が進む。この傾向を逆転させないかぎり、日本の未婚化はますます進むだろう」(山田 2011:151)など。そのなかで、

この「マクロ経済停滞説」は、一貫してあげられる要因といってよい。ただし、次の留意点がある。「低成長により、若い世代の経済力より親世代の経済力の方が相対的に高くなり、女性が結婚する際に希望する基準に見合った経済力を持つ男性が減少しつつある」（山田 1994:211）、「若者は1980年代までは高い経済成長のおかげで、結婚後も親以上の生活水準を維持できた。しかし今は結婚後に親以上の生活を送れず、さらに中流生活から転落するおそれが強まっている。この不安があるから…『…未婚で親と同居しつつづけたほうがまし』と考える若者が出現している」（山田 2016:73）というように、ある時点での独身男性の稼得能力を問題にしているというより、親世代と比較してのそれを問題にしている点である。この点は、（加藤 2011:8）や（阿藤 2011:6-7）が指摘しているように、広く社会科学の文脈でいえば、イースタリンの提唱する世代間所得仮説の発想を継承としているといえるが（Easterlin 1980）、（山田 2005:181-2）は両者の違いについて述べている。なお、本報告以外でも、（神山 2021）、（神山 2024）などで経済停滞説への疑問点を指摘している。

- 4) 後の図で数値の大小を比較していることから明らかなように、協力ゲーム理論も合理的選択理論の一種ということもできる。通常、社会学では、合理的選択理論を個人の意思決定に関するものとして扱っている。ので、説明の分かりやすさを考えてその慣習を踏襲した。また、ここで使用している考え方は、協力ゲーム理論の最も基本的な概念の1つである「提携」についての1つの解釈といえる。協力ゲーム理論自体は数学であり、「提携すること」の社会的意味いかえれば日常言語でそれを何というべきかはいくつもの解釈がありうる。ただ、「約束」という観点から理解するのは、報告者としては本質をついた方向と考えている。この分野で著名な(Binmore 2007:10:182)は、「協力ゲーム理論では、プレイヤーは、モデルの中では説明されない、次のようなブラックボックスが利用できることを前提にしている。…このブラックボックスに関しては、とりわけ次のことが説明されなければならない。すなわち、ゲームを行う前に成立した約束がどのようにして決して裏切られないものとなるのか…。なお、この約束は、プレイヤーたちがゲームでどのように行動すべきなのか、ということを事前に交渉した結果成立したものである。」と述べている。

- 5) この数値例は（神山 2021:91-92）ですでに提示している。

- 6) Becker の結婚理論における協力ゲームの使用は積極的なものではない。数値例で示したロジックは、「提携」概念の適用としてではなく、結婚の定義として示されている。また、同じく協力ゲーム理論の基本概念である「コア」は、ここで示したような個々の結婚についてではなく、社会全体に関わる「結婚市場」について「ゲーム理論の言い方を使えば、コアの外ではいかなる提携も誰かを悪くすることなしに誰も良くすることはできないという意味で、最適な sorting[男女の組み換え]はコアの内にある」(Becker 1973:823-4, 報告者訳)との表現で補足的に用いられるだけである。結婚の位置づけについての本稿との食い違いは、偶々ではなく、経済学の伝統的な基本仮定を重視する Becker は、Binmore がいう「約束」概念を受容しなかったことに由来すると我われは理解すべきである。
- 7) (Cigno 1991=1997 : 15-16)に分かりやすく説明されている。
- 8) 男女別未婚率の推移にみられる、未婚化のトレンドと逆向きのいくつかの「ブレ」は、相手性の人口構造を統制していないためである可能性が高い。詳しくは(神山 2018)、(神山 2021)。
- 9) (筒井 2023:77) は、晩婚化・未婚化の要因として「おそらく一番適切な回答は『さまざまな理由が複合的に重なってこうなった』というものだ」としている。このような、未婚化の理由は複数あり複雑という見解は、これに限らず広くみられると思われるが、ここでの推論は、それらと対比できる。
- 10) 各夫婦は、各々で3区分される6つの時間の配分を最適にしようとするだけでなく、各時間の係数の値を高めようとする仮定できる。結婚の諸側面のうち、現在の我われが最も意識的であるのは愛情や信頼といったその心理・情緒面であろうが、それは、協力関係全体の基盤になると同時に、主に自由時間の価値を高め合う努力の動因としても理解できる。
- 11) 分業による結婚の価値の増分を規定する「男女賃金差」を1つの数量として仮説を実証する試みについては学会報告の形ではすでに行っている(神山 2023)。

- 12)今日の我われがいう現代の未婚化がいつ始まったか明確には特定できないが、国勢調査年で1970-75年では女性20-24歳で未婚率の低下がまだみられるので、それ以降と考えることが多い。一方、『社会生活基本調査』（総務省統計局）は1976年から5年ごとに実施されているが、最初の2回までは、ここで示される項目組みあわせでの集計が行われていないので86年以降のデータを用いる。
- 13)『国民生活基礎調査』（厚生労働省）は1986年から始まり毎年行われているが、2010年以降は世帯構造別平均所得の年齢階級別の集計が公開されていないため、2年ごと2008年までのデータを採用した。
- 14)ここでの「家事時間」は、統計上の4項目（家事、介護・看護、育児、買い物）の時間の合計である。
- 15)1990年代に「両立支援」のコンセプトから始まった「少子化対策」について本稿の観点から現時点で概括をすると、それは、個々にみれば夫婦の育児に役立ったであろうが、同時に、社会全体でみたときは分業から共働きへの転換を促進したであろうから、両方向の効果は相殺し、本来の趣旨に沿った明確な効果はなかったと推測する。実際、合計特殊出生率は1985年に1.76、1995年に1.42の後、2005年1.26、2015年1.45、2025年は1.15人の予想である。なお、転換がほぼ終わったとみられる今後の長期的見通しについては、（神山 2019）（神山 2021）（神山 2023）でふれている。
- 16)収入に関しては適切な指標となる時系列データを得るのが難しい。以下では、結婚した夫婦の収入として『国民生活基礎調査』における「夫婦のみ世帯」および「夫婦と未婚の子のみの世帯」の世帯主の年齢層別（29歳以下および30-39歳）の収入を用い、未婚の男女の収入の代理指標として同じ年齢層の男女単独世帯の収入を合算して使用した。この年齢層の単独世帯の世帯主は独身の可能性が高いという推測による。もちろん、親と同居する20代の未婚者や既婚の単独世帯主など、それ以外のケースも多々あるだろうが、しかし、問題にするのは時系列での差の推移であるため、大きな趨勢をみるための指標としては有効と考える。

17) 念のため付言すると、昔も今も、結婚や家庭は、種々の人間的価値のいわば宝庫になりうることに変わりはないだろう。ただ、未婚化という時代を通じた変化の理由を探るには、同様に時代を通じての結婚の意味の変化、とくに全体としてのその価値の低下に寄与した側面に注目しなくてはならない。

文献

- 阿藤誠 2011 「超少子化の背景と政策対応」(阿藤誠・西岡八郎・津谷典子・福田恒孝(編) 2011 『少子化時代の家族変容—パートナーシップと出生行動』東京大学出版会・序章)
- ベック,U.・鈴木宗徳・伊藤美登里(編) 2011 『リスク化する社会—ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店
- Becker, G. S., 1973, “A Theory of Marriage: Part I,” *Journal of Political Economy*, vol. 81(4).
- Binmore, K., 2007, *Game Theory: A Very Short Introduction*, Oxford University Press = 海野道郎・金澤悠介訳 2010 『ゲーム理論』岩波書店
- Cigno, A., 1991, *Economic of the Family*, Oxfprd univ.pr., U. S. A. = 田中敬文・駒村康平訳 1997 『家族の経済学』多賀出版
- Easterlin, R., 1980, *Birth and Fortune: The Impact of Numbers on Personal Welfare*. Basic Book.
- 原純輔・海野道郎 2004 『社会調査演習 第2版』東京大学出版会
- 神山英紀 2018 「未婚化研究における結婚相手人口の無統制という問題 —ベッカー結婚市場理論にもとづく「両性結婚指標」の提案」(第65回数理社会学会大会[3月14日成蹊大学]) 報告資料)
<https://media.toriaez.jp/q1146/9.pdf> (2025年9月30日確認)
- 神山英紀 2019 「未婚化の終わり—「分業」から「共働き」への転換—」(第92回日本社会学会大会[10月5日東京女子大学]) 報告資料) <https://media.toriaez.jp/q1146/2.pdf> (2025年9月30日確認)
- 神山英紀 2021 「未婚化の終わり—少子高齢パラダイムのゆくえ—」(上村泰裕・金成垣・米澤旦編著『福祉社会学のフロンティア』ミネルヴァ書房・第6章)
- 神山英紀 2023 「男女賃金格差縮小による未婚化の進行と終焉—<昭和婚>〜<令和婚>の転換に伴う水準変動—」(2025年9月30日確認)(第96回日本社会学会大会[10月9日立正大学]) 報告資料)
<https://media.toriaez.jp/q1146/469.pdf> (2025年9月30日確認)

- 神山英紀 2024 「付論 2：未婚化と日本経済の停滞（男性実質賃金の低下）の無関連性について」（第 97 回日本社会学会大会[11 月 9 日京都産業大学]報告資料）<https://www.bunchou.jp/cont4/main.html>（2025 年 9 月 30 日確認）
- 加藤彰彦 2011 「未婚化を推し進めてきた 2 つの力ー経済成長の低下とイデオロギーー」『人口問題研究』67(2)
- Popper, K., 1972, Objective Knowledge: An Evolutionary Approach, Oxford: Clarendon Press. =森博 訳 1972 『客観的知識：進化論的アプローチ』木鐸社
- 盛山和夫 1986 「社会学における理論の発展のために」『社会学における理論と方法』1 巻 1 号
- 筒井淳也 2023 『未婚と少子化ーこの国で子どもを産みにくい理由』PHP 新書
- 山田昌弘 1994 「結婚難と経済成長」『諸君！ー日本を元気にするオピニオン雑誌』26(12)
- 山田昌弘 2005 『迷走する家族 戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣
- 山田昌弘 2011 「The Compass 結婚願望が高まっても未婚化が止まらない不幸」『週刊 東洋経済』(6336)2011, 7/9.
- 山田昌弘 2016 「政府は少子化の真因を無視した」『週刊 東洋経済』(6658)2016, 5/14.
- 八代尚宏 1993 『結婚の経済学ー結婚とは人生における最大の投資』二見書房ベック, U.・鈴木宗徳・伊藤美登里（編）2011 『リスク化する社会ーウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店

参考資料 1

以下は、見田宗介著『現代日本の精神構造』（1965年 弘文堂）「一 現代における不幸の諸形態とその社会的基盤の分析」からの抜粋、1961年の読売新聞の「身上相談」の一部である。

事例 9（一〇・二〇）私は金融機関に勤務する二七歳の女性で、高齢の父母と三人ぐらしをしています。いくつかあった縁談も、両親も私も幸福になれるようにと望んだためまとまらず、現在に至っています。自分では気の進まぬ縁談をするくらいなら、独身で勤め続け両親をみてあげようと思っていますが、近隣や職場では理想が高すぎるとかオールドミスとかげ口をきかれ、職場ではけむたい存在ではないかと思うにつけ、居づらい思いがし、明朗さも失いがちな日々となってしまいました。私たちの職場では共かせぎができず、女子は結婚すると退職しなければなりません。それで経済力をつけたいと洋装を習いはじめ、こんど後期の勉強を東京の本校でおさめ師範免許をとるつもりでいますが、そうすると今の職場をやめねばなりません。東京でどうやって勤め口をさがせばよいのか、家や両親をどうすればよいのか、新聞の求人欄をみても現在の給料の半分にもならないので思案に促されています。（長野・R子）

これについて、見田は「幸福とか成功のイメージに関する一定のステレオタイプができ上がり、そこからはずれた人びとは不幸であり失敗者であるという通念が、ある社会に流通すると、そのこと自体によって、本来必ずしも不幸でも失敗者でもない人びとまでが、焦燥と劣等感に悩まねばならなくなることがある」から始め、この「不幸」を生み出す社会的基盤の分析をしている。

これほど長く答が分からないことになっている「なぜ結婚しなくなったのか？」という問であるが、もし、それをひっくり返して、「なぜ昔は皆が結婚していたのか？」と年配女性に問うたなら、「その頃の若い女性にとって結婚せず生きるという選択肢は実際上なかったのだ」と、簡単に答える人は少なくないだろうと報告者は推測している。

参考資料 2

以下は（Uta-Net <https://www.uta-net.com/song/107778/>）より抜粋

サザエさんのうた

堀江美都子

サザエさん （火曜日）オープニング

作詞： 保富康午

作曲： 渡辺宙明

窓をあけましょう ルルル

呼んでみましょう “サザエさん” ！

明るい窓の おむかいさん

ニコニコ顔出す ゆかいな家族

うちとおんなじね 仲良しね

私もサザエさん あなたもサザエさん

笑う声までおんなじね ハハハハ おんなじね

ドアをあけましょう ルルル

呼んでみましょう “サザエさん” ！

いつでも出逢う ご町内

ニコニコあいさつ やさしい家族

うちとおんなじね たのしいね

がんこなお父さん やさしいお母さん

叱る声までおんなじね ハハハハ おんなじね

誰かが呼んでいる ルルル

叫んでみましょう “サザエさん” ！

みんなが好きな おとなりさん

ニコニコはたらく 元気な家族

うちとおんなじね ほがらかな

やんちゃな弟と かわいい妹と

遊ぶ声までおんなじね ハハハハ おんなじね

以下は wikipedia（「サザエさん（テレビアニメ）」）より抜粋

本番組は、1970 年代から視聴率が高い番組としても知られている（以下の記録はすべてビデオリサーチ調べ、関東地区・世帯・リアルタイム。）。

1978 年には、全テレビアニメの年間視聴率ランキングにおいて 1 位から 26 位まで独占するという記録を残したことがある[注釈 66][210]。翌 1979 年（昭和 54 年）9 月 16 日には歴代最高視聴率である 39.4%を記録（下記）し、ビデオリサーチが調査を開始した 1977 年 9 月 26 日以降に放送されたテレビアニメ全体における歴代二位の高視聴率である[注釈 67]。

1989 年（平成元年）1 月 15 日から 2008 年（平成 20 年）11 月時点での平均視聴率は、22.3%[100][211]。

2010 年代からは視聴率が低下しており、2021 年の平均視聴率が 11.2%、2023 年時点における通常放送の視聴率は 7～9%を前後している[211]。その一方で、テレビアニメの週刊視聴率では現在もほぼ毎週 1 位を記録しているほか、2010 年代から普及したコア（個人、13～49 歳の男女）視聴率やタイムシフト（録画）視聴率は高い数値を記録している[211][212]。

以下は Uta-Net (<https://www.uta-net.com/song/3425/>) より抜粋

浪花恋しぐれ

都はるみ & 岡千秋

作詞：たかたかし

作曲：岡千秋

芸のためなら 女房も泣かす

それがどうした 文句があるか

雨の横丁 法善寺

浪花しぐれか 寄席囃子

今日も呼んでる 今日も呼んでる

ど阿呆春団治

「そりゃわいはアホや 酒もあおるし 女も泣かす

せやかせ それもこれも みんな芸のためや

今にみてみい! わいは日本一になったるんや

日本一やで わかってるやろ お浜

なんやそのしんき臭い顔は

酒や! 酒や! 酒買うてこい!」

そばに私が ついてなければ

なにも出来ない この人やから

泣きはしません つらくとも

いつか中座の華になる

惚れた男の 惚れた男の

でっかい夢がある

「好きおうて一緒になった仲やない

あなた遊びなはれ 酒も飲みなはれ

あんたが日本一の落語家 (はなしか)

になるためやったら

うちはどんな苦勞にも耐えてみせます」

凍りつくよな 浮世の裏で

耐えて花咲く 夫婦花

これが俺らの 恋女房

以下は wikipedia より抜粋

「浪花恋しぐれ」(なにわこいしぐれ)は、1983年5月21日に発売された都はるみと岡千秋によるデュエットシングル。

解説

この曲は、戦前の上方落語界のスーパースター初代・桂春団治の破天荒な生き方とそれを陰で支えた妻・お浜との夫婦愛をモチーフにした曲である。

オリコンチャートでは、発売翌月の6月にはTOP20に登場し8月にはTOP10入りを果たす。以後は翌年2月まで20位以内をキープするロングセラーとなり、賞レースなどでテレビによる歌唱が頻発する12月に入り最高順位3位を記録した。さらに、第25回日本レコード大賞特別金賞・第16回日本有線放送大賞、第16回全日本有線放送大賞

を受賞した。またマレーシアでは康成・刘秋儀のデュエットで【浪花

恋曲】のタイトルで北京語カバーされた。

都と岡は本楽曲で、1983年・第34回NHK紅白歌合戦に出場した。

